

新興国通貨とリスクヘッジ

個人のFX取引でトルコリラ円がドル円に次ぐ取引量になったとの記事を見てちょっと驚いた。

新興国通貨が為替市場でネーミングも含めて市民権を得たのは90年代初めころだが、その時はタイバーツなどのアジア通貨、メキシコペソなどの南米通貨などが主流で、ユーロ誕生後の2000年代に入ると東欧通貨などが脚光を浴びるようになった。

その後BRICsと言う語の広がり象徴されるように新興国通貨は世界的に広がりを持つようになった。こうした中でトルコリラも取引が増えてきたわけだが、それでもドル円に次ぐほどになるとは信じがたい面もある。

トルコリラの人気の理由は金利が高いのでスワップポイントが多く取れる点にあるらしい。政策金利は7.5%で金利水準は確かに高い。

つまり金利差分だけトルコリラが下落しなければトルコリラのロングは利益になる。

だが現実の市場を見ると米ドルトルコリラは年初から2割程度上げている(リラの下落)。新興国通貨はドルの利上げの可能性の高まりで昨年来一般的に下落傾向にあるが、特に経常収支赤字国は売られやすい。トルコはGDPの5%ほどの経常赤字だ。

それにエンドガン大統領の与党はこの前の選挙で過半数割れをして政治的に不安定性を増した。その点ではドルリラは更なる上昇を見込むのが自然だろう。

ただドル円も年初から5%程度上昇(円の下落)していてリラ円での下落は多少緩和される。それにこれは年初からポジションを持った場合の話だ。

一般的には新興国通貨でかなりの高金利の場合はそれなりの理由がある。今年のブラジルレアルの場合はその典型だ。多少の金利差は為替の変動で軽く吹き飛んでしまう。短期ほどその傾向は強くなる。例えばドルリラ(2.7800)が1週間で100ポイント上昇したとする。年率換算すれば19%になる。

となれば長期保有でじっくり勝負となるが、その間不確定要因が多すぎる。

そこでリスクヘッジの話になるが、リラ円のロングを持った場合、完全なリスクヘッジはリラ円のポジションをすべて売ることだが、ドル下落のトレンドが見えた場合は、ドル円を売る。するとドルリラのショートポジションが残る。

逆にドル上昇のトレンドが見えた場合は、ドルリラを買う。するとドル円のロングのポジションに変わる。

これらは部分的リスクヘッジになるが、こうすることで長期保有のポジションも丁半ばくちの要素を減らすことができる。